

群 教 七	G09 - 01
	平 17.225集

これからの小学校における英語活動の充実と 中学校 1 年次の英語科指導の在り方

長期研修員 塩野 直子
長期研修員 荒牧 千晶

（研究の概要）

本研究は、群馬県における小学校外国語会話（英語活動）の現状の把握を通して、課題解決のための具体的な方策や内容を提言することにより、これからの英語活動の充実を図るとともに、連携を必要とする中学校 1 年次の英語科指導の在り方を考察したものである。具体的な提言の内容は、目標と内容、題材選定の視点、年間指導計画、評価の在り方、学級担任の指導上の留意点、校内環境の整備、中学校 1 年次の英語科指導の在り方である。

キーワード 【総合的な学習の時間 - 小 英語 - 中 指導と評価の一体化 指導計画】

主題設定の理由

平成 4 年度に、文部省（現文部科学省）により小学校外国語会話（英語活動）の研究開発学校が全国で 2 校指定され、平成 8 年度には、その指定校が各県 1 校に広げられた。英語活動は、この研究開発学校において先導的な実践研究が行われてきた。この時期に研究開発学校に指定された学校の中には、指定期間が終了した後も英語活動を継続しているところが少なくない。この 10 年あまりの間、公立小学校で英語教育導入のための多彩なカリキュラムと実践が生み出されてきた。しかし、こうした優れた実践をしている小学校は少数であり、多くは、文部科学省が作成した「小学校英語活動実践の手引」（以下「手引」）を英語活動の指導の指針としているようである。

平成 14 年度から完全実施されている学習指導要領の下、小学校においては、「総合的な学習の時間」の中で、国際理解に関する学習の一環として、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど、小学校段階にふさわしい学習活動が行えるようになった。小学校における英語活動のねらいは、言語習得を主な目的とするのではなく、活動を通して異文化を理解して尊重しようとする態度の育成と積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成を図ることである。各学校では、「総合的な学習の時間」の趣旨を踏まえ目標と内容を定め、学校の実態に応

じた英語活動を行うことになっている。英語活動は、児童の発達段階に応じて、歌、ゲーム、クイズ、ごっこ遊びなどを通して、身近な人や物について簡単な英語を聞いたり話したりする体験的な活動を中心に構成される。

平成 16 年度の文部科学省の調査によると、全国の公立小学校のうち英語活動を実施している小学校は 92.1% であり、そのうちの 60.4% は実施時間が 1 ～ 11 時間である。また、1 回の活動時間は 45 分であり、主に学級担任により指導が行われている。一方、現在の研究開発学校の取組は、小学校の英語教育を研究課題としていても、「総合的な学習の時間」の英語活動ではなく「英語科」という教科を設置し、卒業生が進学する中学校と連携して行われており、以前の研究開発学校と内容が異なっている。教育課程の範囲を超えた取組は、小学校に英語が教科として導入される可能性を勘案し、中学校との縦のつながりを意識した段階に入ってきている。

群馬県においても、ほとんどの小学校において英語活動が実施されるようになり、全国の調査結果とほぼ類似した状況である。しかし、文部科学省から研究開発の指定を受けている公立小学校はなく、「英語科」を設置したり、中学校と連携したりしての英語教育の研究は行われていない。英語活動に積極的に取り組む教師のいる小学校や市町村の指定研究を受けた小学校では、積極的に研修が行われたり工夫された実践が行われたりして

いるが、その数は少数である。ALT（外国語指導助手）に指導を委ねて実践を行わざるをえないのが、県内の大多数の小学校の実情である。このように、群馬県では多くの小学校で英語活動を取り入れているものの、まだ手探りの状態であると言える。

さて、英語活動には、国際理解に関する学習の一環として、各学校の主体的、自主的カリキュラム開発と実践が期待されているが、英語の指導経験が少ないという学級担任の状況から、多くの課題が生じている。

具体的には、以下のような主な七つの課題が考えられる。一つ目には、小学校の英語活動の目標と各学年の内容が明確になっていないこと、そのため、二つ目には、どんな英語をどれだけ扱うのかという言語材料の選択や題材選定の視点が明確になっていないこと、三つ目には、従来の「英会話」や「英語教育」の概念にとらわれない新しい教育実践として、各学年の活動の設定や言語材料の配列など、英語活動の指導内容の系統性が欠けていること、四つ目には、英語活動を実施する際、多くの学校では評価が行われていないこと、五つ目には、英語活動において学級担任の役割が明確でなく指導形態が工夫されていないこと、六つ目には、英語活動を支える環境としての校内体制や研修の内容が充実していないこと、七つ目には、英語活動の関連として、中学校1年次の英語科指導において小学校での活動内容や指導方法が生かされていないことである。英語活動に関するこうした問題を、研究開発校での取組を参考にし、教科としての導入を念頭に置きながら解決していきたいと考えている。

本研究では、こうした課題解決に取り組み、群馬県内の小学校教師が充実した英語活動を実施できるようにするとともに、中学校1年次の英語科指導が生徒にとって効果的になるようにするための具体的な方策や内容を提言したいと考え、本主題を設定した。

研究のねらい

群馬県における小学校英語活動の現状の把握、結果の分析を通して、課題解決するための手だてを提言することにより、これからの小学校における英語活動をより充実させるとともに、中学校1年次の英語科指導の改善を図る。

主な研究課題の具体

以下の課題について考察し、具体的な方策や内容を明らかにする。

- 1 英語活動の目標と内容
- 2 英語活動における題材選定の視点
- 3 年間指導計画
- 4 評価の在り方
- 5 学級担任の英語活動指導上の留意点
- 6 英語活動の環境の整備（校内体制と校内研修の在り方）
- 7 英語活動を生かした中学校1年次の英語科指導の在り方

1 英語活動の目標と内容

(1) 現状と課題

学習指導要領の中で、英語活動に関して、総則の「第3 総合的な学習の時間の取扱」で配慮事項として、次のように述べられている。

国際理解に関する学習の一環としての外国語会話等を行うときには、学校の実態等に応じ、児童が外国語に触れたり、外国の生活や文化などに慣れ親しんだりするなど小学校段階にふさわしい体験的な学習が行われるようにすること。（総則第3の5）

「総合的な学習の時間」は、地域や学校、児童の実態などに応じて、横断的・総合的な学習や児童の興味・関心などに基づく学習など創意工夫を生かした教育活動を行うことになっている。したがって、教科とは異なり、目標や学習内容も特に規定されていない。この「総合的な学習の時間」で行う活動であるので、英語活動の扱いについても同様で、何を教えたらよいのかが分からないという不安の声がある。

一方、文部科学省より英語活動の指針とすべき「手引」が、平成13年度に発行されており、第1章の中で英語活動のねらいが、次のように示されている。

言語習得を主な目的とするのではなく、興味・関心や意欲の育成をねらうことが重要である。（第1章の2）

このように、英語活動は英語に触れ、外国の生活や文化に慣れ親しむ英語体験活動であって、英語の習得を主な目的にしたものではないことが明確に示されている。そして、子どもの積極的な参加、体験による主体的な学習活動が期待されている。しかし、ここでも、英語活動の目的や目標が明確に示されていない。

このため、自校の英語活動での目標や内容については曖昧なまま、「手引」に示されている実践事例や言語材料や活動を参考にしたり、研究開発校などの先進校の実践を参考にしたりして、英語活動を行っているのが現状である。

(2) 解決策

学習指導要領総則「第3 総合的な学習の時間の取扱」での配慮事項や「手引」の第1章の2の趣旨に基づいて、英語活動の目標を次のように示したいと考える。

英語活動の目標

身近な英語に慣れ親しんで、英語で互いに交流することを楽しむ態度を育て、英語を活用しようとする素地を培う。

この目標は、「身近な英語に慣れ親しむ」こと、「英語で互いに交流することを楽しむ態度を育てる」こと、「英語を活用しようとする素地を培う」ことの、三つの柱から成り立っている。

「身近な英語に慣れ親しむ」とは、英語活動において、身近な英語に触れ、表現に慣れ親しむことが重要であることを述べたものである。小学校の多くの児童が英語活動に運用されるわずかな時間に初めて英語に出会うという実態から、児童の日常生活の中の身近な英語を扱うことが大切である。また、児童が英語の表現に慣れ親しむようにするためには、学級担任やALTとの温かな信頼関係に基づいた楽しい雰囲気の中で、英語に触れ、聞いたり話したりする活動を体験できるよう配慮しなければならない。このような体験の積み重ねを通して、児童が英語で表現することを自分の表現方法の一つとして身近に感じ、親しんでいくことが期待できると考え、最初に位置付けた。

「英語で互いに交流することを楽しむ態度を育てる」とは、慣れ親しんだ英語を使って、自分のことを相手に伝えようとしたり、相手のことを理解しようとしたりするなどして、進んで学級担任やALT、友達と交流を図ろうとする態度を育てる

ことである。慣れ親しんだ英語をモチーフとしながら、見振りや手振りや表情によって表現できたという満足感や、教師や友達と交流する楽しさを十分に味わわせることが大切である。このような体験の積み重ねを通して、児童が進んで人とかわらうとするようになることが期待できると考える。

「英語を活用しようとする素地を培う」とは、「聞いたり話したりする」体験的な活動である英語活動がねらいとする興味・関心や意欲、態度などを明示したもので、最も重要な内容となるものである。英語活動を通して、児童が自分の生活と外国の文化の共通点や相違点に気付いたりする活動をきっかけに言葉や文化に関心をもつとともに、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現しようとする態度を育成することが大切である。これは、「身近な英語に慣れ親しむ」ことや「英語で互いに交流することを楽しむ態度」が裏付けとなり、互いに密接に関連し合いながら培われていくものであると考える。また、中学校の英語科学習が目指す実践的コミュニケーション能力の基礎を養う大切な手がかりとなるものであると考える。

現在、英語活動が「総合的な学習の時間」で行われているため、英語活動の目標は、第3学年から第6学年にわたって示すことにした。

各学年の目標は、英語活動の目標に示した「身近な英語に慣れ親しむ態度」「英語で互いに交流することを楽しむ態度」「英語を活用しようとする素地」の三つに対応して示すようにした。

各学年の英語活動の内容

- ア 聞くことに関する内容
- イ 話すことに関する内容
- ウ 読むことに関する内容
- エ 書くことに関する内容
- オ 自国や外国の文化への関心に関する内容

各学年の英語活動の内容は、5項目で構成するようにした。現在の小学校での国際理解に関する学習の一環としての英語活動は、児童の英語への興味・関心や、英語を活用しようとする態度の育成を養うことととらえ行われていることが多い。楽しみながら英語と触れ合い英語活動への意欲を高めるとともに、本格的に英語を学習する中学校

への橋渡しとなるよう、中学校外国語科(英語科)の4領域に対応させ、ア～エを内容として示した。また、英語活動を通して異文化の代表としてのALTと身近に触れ合う経験は、英語や異なる文化をもった人々に対する先入観や抵抗感を軽減したり、異文化への関心を高めたり受け入れたりする役割を果たすと考え、オを内容として示した。

ア「聞くこと」では、注意深く英語を聞こうとする態度を養うことを示した。身振り・表情、具体物などを手がかりにしながら聞き慣れた英語の単語やフレーズを聞き取り、想像しながら英語を聞こうとする態度を養いたい。英語活動は英語の音やリズム、イントネーションに慣れる時期であり、「聞くこと」が最も重要な内容であると考えられる。

イ「話すこと」では、英語を通じて伝え合おうとする態度を養うことを示した。相手の言ったことを受け止めた上で、自分の知っている英語などで応じようとするを大切にしたい。そのためには、発音の流暢性を全員の目標に設定するのではなく、英語を使って人とかかわる楽しさを体験できるようにすることが大切であると考えられる。

ウ「読むこと」では、文字への関心を高める態度を養うことを示した。大切なことは、「聞く」活動を通して十分に慣れ親しんでいる表現に関連させて行うことであり、児童に心理的な負担を与えないように工夫する必要がある。音声と併せて絵と単語の書いてあるカードなどで英語表現に触れ、慣れ親しんでいくうちに、児童は文字への興味・関心が高まり、視覚を使って英語を身近にしようとするようになる。そこで、発達段階を考慮し、「読むこと」にかかわる態度を第5学年と第6学年に示した。

エ「書くこと」では、英語の音声と文字の関係への関心を高める態度を養うことを示した。日本語と異なる英語の表記方法への関心を高める態度を養うことは、中学校の英語科学習への有効な橋渡しとなるであろう。そのために大切なことは、目や耳で慣れ親しんだ英語表現について書くことを通して、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」の活動にも役立ち、相互に英語活動を促進するようにすることである。現在、第4学年国語科の学習でローマ字について学習することを考慮し、「書くこと」にかかわる態度を第4学年から示した。

オ「自国や外国の文化への関心」では、英語を通して考えたり、表現したり、互いに共感し合っ

たりする態度を養うことを示した。英語という外国の言葉への興味・関心、ALTとのふれあい、外国の生活や文化への興味・関心など情意面の高まりは、英語への不安を少なくし、英語に慣れたり親しんだりする動機付けを高め、活動意欲を促進すると言われている。こうした興味・関心などの情意面も目標達成のための重要な内容であると考えられる。英語という世界を通して日常生活や物の考え方を広げていくようにすることが大切である。

英語活動は音声中心で行われる活動であり、「聞くこと」と「話すこと」への比重が高い。しかし、各学年の発達段階や児童の興味・関心に対応し、五つの内容を互いに補完し合いながら活動を行うようにすることが大切である。

〔第3学年の目標と内容〕

目標：身近な英語に関心をもち、聞いたり動作化したりして、活動の面白さを実感しようとする。

内容：

ア「聞くこと」

身振りや表情、具体物などを手がかりにしながら、発音のとおり聞き取るうとしたり、正しく反応しようとする。

イ「話すこと」

生活に身近な英語の音やリズムに関心をもち、発話しようとする。

ウ「読むこと」

取り扱わない。

エ「書くこと」

取り扱わない。

オ「自国や外国の文化への関心」

英語活動を通して、外国への関心をもとうとする。

児童一人一人が初めて英語活動を体験する第3学年は、英語活動への入門期と言える。入門期においては、児童が英語で活動することを楽しむことが中心的な内容となる。児童が英語の音やリズムを楽しむ体験を活動に生かしていくことを考えたい。このような時期をとらえ「聞いたり動作化したりして、活動の面白さを実感しようとする」態度を育てることが主なねらいである。

この時期の児童は、耳からの記憶に優れていることに加え、聞いたことを何のこだわりもなく口に出したり、体を動かしたり、発表したりすることが得意な年齢である。指導者の話す英語の音やリズムなどを感覚的にとらえ、その場の状況や動作などを通して理解し、日本語に置き換えることをせず、自然に受け入れようとする。したがって、ALTや学級担任が楽しい雰囲気の中で十分に英語を聞かせることを通して、児童が英語の音やリズムに慣れ、聞いて分かるという体験を積めるような場を設定することが望ましい。この体験が、その後の英語活動において音声中心の活動に意欲的に取り組むための大切な第一歩となる。

ア「聞くこと」の内容は、「聞いたり動作化したりして、活動の面白さを実感しようとする」を具体化するものである。外来語として耳にしてきた単語が、英語として発音されるのを注意深く聞くことができるように指導することが大切である。耳に入ってきた英語から、直接、具体物を持ったり、指し示したり、動作化したりするなど活動の工夫が必要である。これらの耳に入ってきた英語に対する反応は、口頭で反応するかわりに身

体で反応するものであり、この経験の積み重ねが「話すこと」へ無理なく移行していくと期待できる。

イ「話すこと」において、「聞くこと」の直後に話させようとすることは、大きな心理的負担になる。言われていることは分かるがまだ発話には至らない児童が、ALTの指示に従って繰り返し体を動かしたり、学級担任と活動の楽しさを共感したりするうちに「話したい」という思いが高まり、指示されることなく思わず声に出すことが実現できるように配慮することが大切である。

オ「自国や外国の文化への関心」では、一年間の英語活動を通して、学級担任やALTとの温かなふれあいを体験させたい。この体験は、その後の英語活動や異文化体験への関心を高めたり、受け入れたりすることにつながると考える。入門期における英語活動では、一人一人の児童と対話するように心がけ、児童が活動への充足感を味わえるようにすることが大切である。

なお、聞いたり話したりする活動を通して英語の音やリズムに慣れることが求められる入門期である第3学年では、ウ「読むこと」とエ「書くこと」については扱わない。

〔第4学年の目標と内容〕

目標：身近な英語に関心を持ち、聞いたり話したりする活動を通して、進んで活動しようとする。

内容：

ア「聞くこと」

身振りや表情、具体物などを手がかりにしながら、単語や意味のかたまりを聞き取るようとする。

イ「話すこと」

生活に身近な単語や簡単な日常会話を、英語の音やリズムに注意しながら話そうとする。

ウ「読むこと」

取り扱わない。

エ「書くこと」

自分の名前をアルファベットで書こうとする。

オ「自国や外国の文化への関心」

英語活動を通して、外国の言葉や生活に関心をもとうとする。

第4学年は、感覚的に音の流れをとらえる能力が優れている最後の時期である。そこで、第3学年の活動経験を生かし、第5学年になっても音声を重視した学習方法を続けられるように、その基礎をつくるのが大切となる。このような時期をとらえ、「聞いたり話したりして、進んで活動しようとする」態度を育てることが主なねらいである。

この時期の児童は、英語の音やリズムやイントネーションを自然に体得するために、伸び伸びと大きな声で表現したり、友達と上手に活動したりすることができる年齢である。活動の中で相手に何かを伝えなければならない時、英語だからといい加減にせず、本当のことを言おうと真剣に考えようとする。自分のことであると言いよんだり、はっきり言いたがらない高学年児童とは大きく異なる点である。一方、自我がはっきりしてくる頃でもあり、英語を聞いたり見たりした時に、分からない部分を気にし始めて考え込むようになる。第3学年の頃、何の屈託もなくALTや学級担任のまねをして分かった部分だけを発話しようとしていた頃と比べ、大きな転機にさしかかる。したがって、活動が機械的な練習にならないよう、児童が表現する（伝える）内容のイメージを明確にとらえて聞いたり、話したりする活動ができるように留意することが大切である。

ア「聞くこと」においては、第3学年と同じように、英語の音やリズムやイントネーションを大切にするとともに、聞いて理解できる語彙を増やすようにすることが望ましい。歌や活動のルール説明などを聞き、実際に体でやってみるなどの体

験の積み重ねが効果的である。簡単な絵本の読み聞かせをすることも、注意深く聞くことを促すだけでなく、英語への関心を高めるのに効果的である。

イ「話すこと」においては、口を動かしながら、英語に楽しく触れられるよう活動を工夫する必要がある。表現する内容のイメージを明確にとらえ、身近な話題を取り上げて表現しようとする意欲を大切にしたい。この学年の児童はゲーム的な活動を好んで行う。活動の仕方が分かると、さらに、自分なりに工夫し新しい活動の仕方を編み出そうとする。新しい言語材料を導入する時、それを応用発展させる時、ゲームの手法を用いると思わず大きな声を出して活動する場面を目にすることが多い。扱う英語の素材に関しては前学年と同じか語彙数を増やす程度にし、児童と教師が活動を通して楽しく触れ合ったり、児童が相互に尋ね合ったりするなどの機会を意図的に設けるよう配慮することも大切である。

エ「書くこと」においては、国語科でローマ字を学習する時期をとらえて扱うこととした。自分の名前を英語で書く活動を取り入れるなどして、文字への関心を高めることが望ましい。掲示物や絵本の読み聞かせを通して文字への関心を高めていくようにしたい。特に、読み聞かせをしてくれる人の肉声を通して、児童は、その文字の連なりや文に意味のあることを次第に発見していくようになる。また、アルファベットにはそれぞれ音があるということに気付いていくであろう。このことは、「書くこと」や「読むこと」へと発展していくものと考えられる。

オ「自国や外国の文化への関心」においては、活動を通して、周囲の人やものやできごとなどへの興味や関心の広がりを大切に育てたい。ALTとのふれあいを通して、ALTの出身国をきっかけにし、自分の生活と比べたりしながら、関心をもてるようにすることが効果的である。

〔第5学年の目標と内容〕

なお、聞いたり話したりする活動を通して、感覚的にとらえた英語の音やリズムを声に出して伸び伸びと取り組めるようにすることが求められるため、第4学年では、ウ「読むこと」については扱わない。

目標：身近な話題に関する単語や日常会話に関心を持ち、英語の音やリズムに注意を払いながら聞いたり話したりして、楽しく活動しようとする。

内容：

ア「聞くこと」

身近な聞き慣れた英語のフレーズやつながりのあるいくつかの文を手がかりに、内容を想像しながら聞こうとする。

イ「話すこと」

身近な聞き慣れた英語のフレーズや見慣れた文字を手がかりにして、自分の伝えたいことを工夫しながら話そうとする。

ウ「読むこと」

頭文字や単語を見て、聞いたり話したりすることに生かそうとする。

エ「書くこと」

聞き慣れた表現や見慣れた表現について、なぞり書きしたり転写したりして文字に表そうとする。

オ「自国や外国の文化への関心」

英語活動を通して、自分たちとは異なる文化をもつ人々の生活に気付き、関心をもとうとする。

第5学年は、日常生活での経験が豊かになるとともに、論理的に考え物事を筋道立てて理解しようとする時期である。その学習態度の変化を考慮しながら、第4学年の時から培ってきた音声に対する柔軟な感性を大切にして、対話による活動の場を工夫して行うことが重要である。このような時期をとらえ、「英語の音やリズムに注意を払いながら聞いたり話したりして、楽しく活動しようとする」態度を育成することが主なねらいである。

この時期の児童は、これまでのような歌やゲーム中心の英語活動では満足しなくなってくる。「英語らしく言えるようになりたい。」「もっと、難しい英語に挑戦したい。」という知的欲求の高まりを見せる児童が多い。英語を聞き取る中で分からない単語があることに気付くようになり、単語の一つ一つの意味を知りたがったり、文字を追って読もうとしたり、納得できる説明を聞いて理解しようとしたりする児童が見られるようになる。一方、思うように表現できないという英語に対する苦手意識を感じ始める児童もいる。英語活動に対する興味・関心の差が大きくなる時でもあるの

で、英語表現や活動の仕方などにおいて、一人一人の児童が自己達成感を得られるような内容や活動の工夫が必要である。

ア「聞くこと」においては、思考力・推理力が発達してくる時期であるので、イメージを組み立てやすい状況を設定したり、既習表現を手がかりにしたりして、内容を想像しながら聞こうとする態度を育てたい。また、無意味な音をそのまま受け入れることに心理的な抵抗を感じる時期でもあるので、新しい語彙に出会う場面では提示の仕方を工夫しながら、英語特有のリズムやイントネーションを身に付けることを大切にしたい。

イ「話すこと」においては、対話による聞き取りを生かして口頭で繰り返し練習したり、発表したりする活動に数多く取り組めるようにし、第6学年の活動に効果的につなげられるようにしたい。この時期には、教科学習の内容も高度になり、母語での知識の吸収も著しく、同時に、英語活動の学習を始めたばかりの頃と比べ、幅の広い語彙を選択することができるようになっている。「No」という言葉を自分が話そうとする文の最後につけ

て伝えようとしたり、自分の知っている文をどうにか駆使して表現しようとしたり、頭に浮かんでくる日本語を英語に当てはめて意思を伝えようとしたりするなど、中間言語的表現を耳にすることがある。こうした場面では、ALTや学級担任が、児童に分かりやすい平易な表現でゆっくり正しい表現を聞かせることを繰り返し行うことが望ましい。高学年の時期には、いかに中間言語を表出させる環境を作るか、それをどこまで相手に分かりやすくできるか工夫が必要である。

ウ「読むこと」においては、音声中心の活動の支えであるという原則に立って長期的な見直しをもつた指導が大切である。「読むこと」が可能になると、耳と口だけで記憶するという不安定さ、不確かさが解消され、記憶したものを目に見える形で保持したり、忘れても「読むこと」を通してよみがえらせることができ、それを頼りに反復することも可能になるという利点が生じる。このことは、この時期の児童の知的欲求に応えるとともに、英語活動に対する意欲を高めることになると考える。したがって、「実物 音声 理解」の構築ができるまで十分に「聞くこと」や「話すこと」の活動を行い、文字を音声のかたまりとしてとらえられるようにし、実物、音声、文字の関係に慣れていけるよう配慮することが必要である。英語のインプットができ音やリズムについて〔第6学年の目標と内容〕

分析的な見方ができるようになる第5学年は、文字を「読むこと」の活動を意図的に取り入れる適期と言えよう。その際、フォニックスの考え方を指導に取り入れることが効果的であると考える。

エ「書くこと」においては、第4学年までに培った英語の音やリズムに対する直感やひらめき、創造性を生かしながら、「聞くこと」「話すこと」「読むこと」と関連させながら指導を行うようにする。つまり、「実物 音声 理解」の構築を踏まえた上で、実物、音声、文字の関係に慣れ、自然に文字を読んだり、書いたりするという過程を大切にしなければならない。しかし、第4学年で学んだとはいえ、アルファベットへの習熟の程度は十分とは言い難い状況であることが多い。大文字や小文字、書き順などに注意を払って行えるよう、なぞり書きや転写などの手だてを投入することが望ましいと考える。また、提示用絵カードに加えて児童用学習カードにもテーマや活動の鍵となる表現などを記載したり、時には児童が選択した表現を文字で表記させたりし、それを手がかりとして活動することも効果的である。

オ「自国や外国の文化への関心」においては、文字への関心が高まっている時期であるので、「総合的な学習の時間」の活動や他教科の学習と関連を図るなどして、英語活動を通して高まった異文化への関心をさらに高めるようにしたい。

目標： 身近な話題に関する単語や日常会話に関心をもち、状況に応じて適切に尋ねたりこたえたりして、友達と協力しながら楽しく活動をやり遂げようとする。

内容：

ア「聞くこと」

身近な聞き慣れた英語のフレーズやつながりのあるいくつかの文を手がかりに、大切な部分を聞き取ろうとする。

イ「話すこと」

身近な聞き慣れた英語のフレーズや見慣れた文字を手がかりにして、相手に応じて、自分の伝えたいことを工夫しながら話そうとする。

ウ「読むこと」

聞き慣れた単語や文を見て、聞いたり話したりすることに生かそうとする。

エ「書くこと」

簡単な表現について、なぞり書きや転写をしたりしてカードや手紙に表そうとする。

オ「自国や外国の文化への関心」

ALTや外部講師との交流や異文化体験に積極的に取り組み、英語を用いた交流の広がりを実感するとともに、外国の言葉や生活に関心をもとうとする。

第6学年は、生活範囲も広がり社会的知識も増え、素早く的確な判断もできるようになり、最上

級生として学校でも指導的な立場に立つことが多くなっていく。また、中学校への進学を意識する時期でもあり、英語活動に対する関心は前学年に比べて一層高くなっていく。この時期をとらえ「状況に応じて尋ねたりこたえたりして、友達と協力しながら活動をやり遂げようとする」態度を育てることが主なねらいである。

この時期の児童は、第4学年の始めのころまで大きく声を弾ませて英語を話すことを楽しもうとしていたのと大きく変化し、大変用心深く、自分の発話とALTや学級担任の英語との差を意識して、なかなか声を出そうとしなくなってくる。聞き慣れない単語や使い慣れない単語があると、それが気になって、類推したり判断したりする勇気がないように見受けられることが多い。知的欲求も高まるので、児童が表現したがる内容に合わせて語彙を増やしたり、既習の文型を発展させたりするなどして、この学年なりの知識を英語で表現するなどの場を設定したいものである。また、英語のインプットによる蓄積が多くなっているため、「読むこと」や「書くこと」の体験が深まる時期でもあると考える。

ア「聞くこと」においては、これまでに培った耳に入った英語を日本語を介さず感覚的にとらえようとする力をもとに、相手が伝えようとしている大切な部分を聞き取ろうとする態度を育てたい。そのためには、心身の成長に合わせた題材を選定し、英語で交流しながら、英語の音の流れに慣れ、交流を続けられるようにし、互いに口頭で発表することのできる活動の場を設定することが望ましいと考える。

イ「話すこと」においては、「聞くこと」と関連させながら、相手の話す内容に応じて、自分の伝えたいことを工夫して話そうとする態度を育てたい。そのためには、既習の内容に加えて、児童が表現したがる内容に合わせて、語彙を増やしていくことが必要である。また、当然のことながら、英語の語彙だけでは十分に表現しきれないことが生じてくる。このような場面では、これまでの既習経験を生かし、言葉によらない表情や身振り、絵、具体物などの伝達手段を駆使して交流を継続できるように促すことも必要であろう。

ウ「読むこと」においては、音声中心の活動の支えであるという原則に変わりはない。視覚的に文字と結び付けて正しい音で読めるようにし、音声中心の活動の活性化を図るようすることが望

まれる。こうした活動を繰り返し行うことを通して、児童は、少しずつ「読めた。」という喜びや満足感を実感し、「もっと読めるようになりたい。」という意欲が喚起され、自ら身の回りの英語をどんどん取り入れようとする自主的な取組をすることが期待できる。

エ「書くこと」においても、「聞くこと」や「読むこと」と関連させながら自然に文字を書こうとする態度を育てたい。聞き慣れた簡単な英語表現について、大文字と小文字に注意を払って正確に書いたりする活動を心がけたい。このとき、フォニックスの考え方を取り入れた指導を意図的に投入することを通して、音と文字の関係や、単語の綴りや文への興味が高まることを期待できる。こうした情意面の高まりは、頭に浮かんでくる日本語の順に英語を当てはめて表現しようとする中間言語的な表現を少しずつ修正し、英語特有の表現をしようとするきっかけになると考える。

オ「自国や外国の文化への関心」においては、小学校英語活動の最終学年であるので、「総合的な学習の時間」や学校行事と連動し、校外において外国人と英語で交流する英語体験を設定したいものである。この体験を通して、「英語が通じた。」「前より分かるようになった。」などの充足感を得られるように活動を支援することが重要である。

各学年の目標と内容の一覧表を次ページの表1に示した。

表1 各学年の英語活動の目標と内容

学 年	目 標	内 容				
		聞くこと(L)	話すこと(S)	読むこと(R)	書くこと(W)	自国や外国の文化への関心
第三 学年	身近な英語に関心を持ち、聞いたり動作化したりして、活動の面白さを実感しようとする。	身振りや表情、具体物などを手がかりにしなが ら、発音の通りに聞き取ろうとしたり、正しく反応しようとする。	生活に身近な英語の音やリズムに関心を持ち発話しようとする。			英語活動を通して、外国への関心をもとうとする。
第四 学年	身近な英語に関心を持ち、聞いたり話したりする活動を通して、進んで活動しようとする。	身振りや表情、具体物などを手がかりにしなが ら、単語や意味のかたまりを聞き取ろうとする。	生活に身近な単語や簡単な日常会話を、英語の音やリズムに注意しながら話そうとする。		自分の名前をアルファベットで書こうとする。	英語活動を通して、外国の言葉や生活に関心をもとうとする。
第五 学年	身近な話題に関する単語や日常会話に関心を持ち、英語の音やリズムに注意を払いながら聞いたり話したりして、楽しく活動しようとする。	身近な聞き慣れた英語のフレーズやつながりのあるいくつかの文を手がかりに、内容を想像しながら聞こうとする。	身近な聞き慣れた英語のフレーズや見慣れた文字を手がかりにして、自分の伝えたいことを工夫しながら話そうとする。	頭文字や単語を見て、聞いたり話したりすることに生かそうとする。	聞き慣れた表現や見慣れた表現について、なぞり書きしたり転写したりして、文字に表そうとする。	英語活動を通して、自分たちとは異なる文化をもつ人々の生活に気付き、関心をもとうとする。
第六 学年	身近な話題に関する単語や日常会話に関心を持ち、状況に応じて適切に尋ねたりこたえたりして、友達と協力しながら、楽しく活動をやり遂げようとする。	身近な聞き慣れた英語のフレーズやつながりのあるいくつかの文を手がかりに、大切な部分を聞き取ろうとする。	身近な聞き慣れた英語のフレーズや見慣れた文字を手がかりにして、相手に応じて、自分の伝えたいことを工夫しながら話そうとする。	聞き慣れた単語や文を見て、聞いたり話したりすることに生かそうとする。	簡単な表現について、なぞり書きや転写をしたりしてカードや手紙に表そうとする。	A L T や外部講師との交流や異文化体験に積極的に取り組み、英語を用いた交流の広がりを実感するとともに、外国の言葉や生活に関心をもとうとする。

2 英語活動における題材選定の視点

(1) 現状と課題

児童が英語を使って交流することが楽しいと実感できるようにするために、体験的な活動を中心として展開されることが望ましいとされている。英語活動は英語を活用しようとする興味・関心や意欲の育成を重視しているため、生活に身近な場面で児童が英語で話してみたいと思う内容について、英語を使う活動の場を設定することが鍵となると考える。

ところが、「何のために」という英語活動の目的や目標が明確になっていないため、どのような

題材を扱ったらよいのかわからないという不安と疑問の声がある。国際理解に関する学習の一環としての英語活動に対して、各学校の主体的、自主的カリキュラム開発が期待されているが、実際には、「手引」の実践編に紹介された題材の活動例や、研究開発校の年間指導計画にある題材に習って、自校の英語活動を行っている小学校が多いのが現状である。

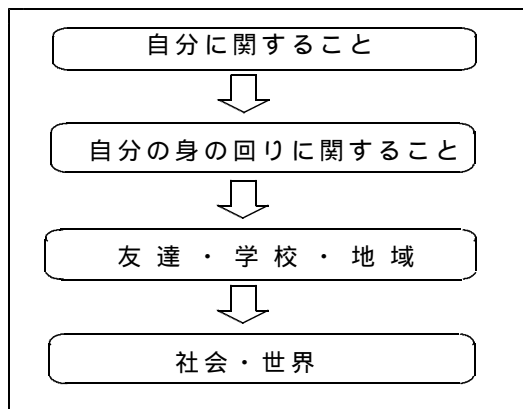
(2) 解決策

題材選定の視点として、次の3点を示したい。これらの視点と各学校の実態とを合わせて、各学校の題材を選定することが望ましいと考える。

児童の生活全体を見わたす。

英語活動の題材づくりでは、単に教える単語や文を並べるのではなく、児童と英語の適切なかわりを作り上げることが大切であると考え。児童の生活や学習状況を分析し、児童にどんな英語体験がふさわしいかで決定することになる。そのためには、児童を中心に置き、生活空間の広がり（図1）と英語活動経験年数に応じて、題材を選定することが大切である。

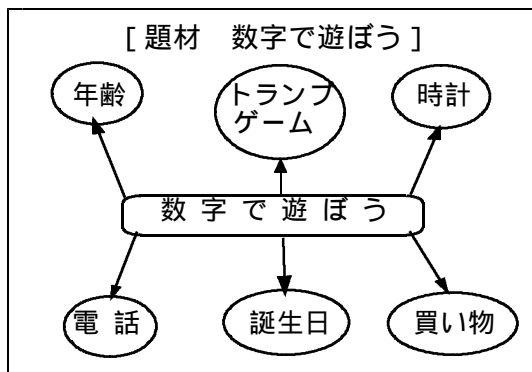
図1 児童の生活空間の広がり



内容を大きなまとまりでとらえる。

英語活動は、児童に英語でどんな活動や体験をさせるかが題材作りの鍵である。活動を大きなまとまり（図2）でとらえ、その構成要素を考え、児童の発達段階、英語活動経験年数や生活空間の広がりに応じて、選択するようにする。この時、生活科や「総合的な学習の時間」の単元名のように、活動の内容が分かるような題材名となることが望ましい。

図2 内容を大きなまとまりでとらえた例



児童の興味・関心や他教科の学習を生かす。

児童が伸び伸びと、楽しく英語体験活動ができるためには、児童の興味・関心を生かした題材を選択することが大切である。発達段階によって興味・関心が異なるので、児童の生活や学習経験、学習環境を観察し、英語との適切なかわりが作れるよう選択することが大切である。

児童が興味・関心をもつ題材の例を表2に示した。

表2 児童の興味・関心の例

あいさつ、友達、家族、野菜、色、数、文房具、身体、果物、動物、乗り物、時間、電話、職業、スポーツ、外国の遊び、教室にあるもの、学校探検、世界地図、旅行ごっこ など

3 年間指導計画

(1) 現状と課題

英語活動の実施時数が少ない場合、研究開発学校の実践資料や「手引」に例示された活動内容をそのまま参考にしたり、ALTの計画に委ねてしまうという状況が小学校で見受けられる。これでは、自校の児童の実態や指導の立場にある学級担任の考えに合わない場合もあると思われる。

年間指導計画表を作成するためには、各学校の実態に応じて目標と内容を設定し、児童の発達段階や興味・関心を考慮して題材を決定することが望ましい。その後で、場面にふさわしい基本的で、応用のきく言語材料（語句や表現）を選定する。しかし、この言語材料の選定には、中学校や高等学校の英語教育のように一定の基準があるわけではない。一般的には、学習経験年数に応じて、同じ題材や活動であれば、言語材料を増やしていくということになるであろう。大切なことは、学習経験年数に応じて作成するということである。また、必ずしも小さい学年の児童にとって長い文が難しいとはいえないという実践校の報告も多い。ここに、自校の実態に応じた年間指導計画表の作成や言語材料の選定の必要性があると考え。

しかしながら、英語活動の文献や先進校の実践を調べると、年間指導計画表作成のおおまかな手順、年間指導計画例がそれぞれ単独で示されてい

る事例ばかりであり、年間指導計画表作成の基本的な考え方や題材の選択、配列までの一連の考え方が示された事例を目にすることは難しい。そのため、各学校が、研究開発校の活動計画や「手引」に例示された活動内容をそのまま使用するなどの状況になっているものとする。

(2) 解決策

ここでは、児童が英語と適切にかかわれるような意図的な英語体験の設定のために、前項2で述べた題材選定の視点に基づいて選択した題材例を示し、各学年の発達段階に適した配列を行うまでの考え方や、第3学年から第6学年までの題材の配列の例を示したい。

表3 活動の素材(題材)の例

児童の生活空間の広がり	題材の例
自分に関する事	あいさつ、色、数、形、動作、体の部位、気持ち・健康、方向、生活行動、家族、文房具、衣類、持ち物など
自分の身の回りに関すること	動物(体・鳴き声等含む) 果物・野菜、花、食べ物、飲み物、食器、家(日用品や家具などを含む)、職業など
友達や学校に関する事	科目、教室、学校、楽器、遊び、遊び道具、学校行事、スポーツなど
地域・社会・世界に関する事	場所(建物、自然、道順) 乗り物(部品を含む) 旅行(持ち物を含む)、買い物、地域の行事、国など
その他	天候、時間、曜日、週、月、季節など

題材選定の視点として示した「子どもの生活全体を見わたすこと」では、生活空間の広がりを示した。

上の表3は、生活空間の広がりを柱に、児童にとって具体的で身近なものや現実感のある日常的なもの、興味・関心のあるものを主な視点にして活動の素材となる例についてまとめたものである。

これらすべてを題材にして活動を行うのではなく、各学校の児童の学年、興味・関心、英語活動経験年数、学習環境などに応じて、取捨選択したり、統合したりして題材として選定する。

この時、各学年に適した題材が配列できるよう、活動場面や言語材料、活動方法を念頭に題材名を決定する。

次に、各学年に適した題材配列上の留意点について示したい。

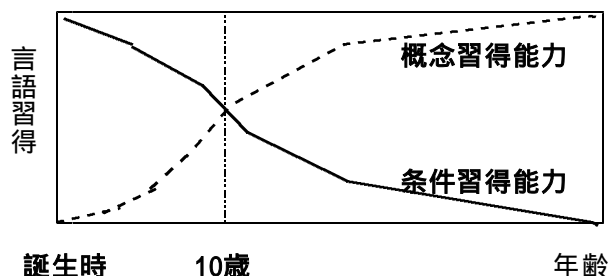
一般的な発達段階を考慮する

児童と英語との適切なかかわりを生み出すためには、児童の興味・関心を最大限に生かした活動を行うことはもちろんであるが、発達段階や既習経験を踏まえて行うことが先決である。なぜなら、どんなに児童の関心が高い内容や活動方法であっても、実態に合わない難しい活動では、児童の活動意欲は減退するばかりだからである。

アンダスン^{*1}は、言語習得において、「言語の条件習得能力(一定の条件に置かれれば、否応なしにその言語を身に付けることができる)は、誕生の時頂点にあるが、その後、年齢を重ねるにつれてしだいに低下する。一方、概念習得能力(言語を概念的に把握し、理屈で覚えようとする)は、誕生時に低い、次第に上昇する。」と述べている。

*1 Andersson, T. 「Foreign Languages in the Elementary School」

図3 言語習得と年齢の関係



つまり、10歳くらいが、この二つの能力の調和点となり、一種の指導の分岐点ととらえることができる。したがって、第4学年の指導に当たっては、児童の様子の変化を見落とさないように留意することが大切である。

各学年に適した活動方法を選択する

第3学年は、言葉の意味や文法構造を意識せず楽しく活動することが適している年齢でありドリル的な活動やTPR^{*2}、歌、ダンス、カード合わせゲームなどの活動方法が適していると考えられる。また、学級担任やALTの指示を肯定的に受け入れる時期であるので、教師とともに活動するような形態が適している。

*2 Total Physical Response

教師の指示に従って体を動かす活動

第4学年以降は、概念的に言語を把握し、理屈で覚えようとする年齢であるので、ある場面設定に基づいて児童が互いに英語で交流することや役割演技や「Information gap」のゲームなど児童相互の交流を伴う活動形態が適していると考えられる。また、何となく感覚的にとらえて活動するのではなく、視覚で確認しながら納得して活動したい時期でもあるので、文字を効果的に導入していくことも、活動を具体化していく上で重要である。

各学年に適した言語材料を選択する

聞いて理解できる語彙が豊富であることは、英語で交流するための基盤となる重要な要素である。10歳前後の児童は聴力に優れ、感覚的に言語をとらえたり、繰り返しを楽しんだりするという特性を備えている点、聞いて理解できる英語を貯える好期である。

したがって、英語活動の入門期となる第3学年では、自分に関する題材に対応し、身の回りの名詞を中心に取り上げることが望ましいと考える。学年が上がるにしたがって、関連性のあ

る語彙や児童の興味・関心の高い語彙を提示し理解できる語彙を意図的に増やしていくようにすることが望ましい。

動詞については、始めに、be動詞や簡単な動作動詞、使用場面の多い「have」や「like」を選択し、身の回りに関することの表現活動で繰り返し体験することを通して、語彙を増やしたい。

また、英語活動の体験を重ねるにしたがって、単語や表情や身振りで応じていた児童は、既習表現を駆使しながら、聞き慣れた英語のフレーズや文、さらにはいくつかの文で表現しようとするようになる。こうした児童の実態を踏まえ、題材に適した平易なダイアログを提示したり、「and」や「but」などの接続詞を使用したダイアログを提示するなどして、工夫することが大切であると考えられる。

図4は、各学年に適した題材を配列するために、これまで述べた内容を表にまとめたものである

図4 各学年に適した題材配列の留意点

学 年	第3学年	第4学年	第5学年	第6学年	
言語習得	条件習得		概念習得		
	← Most message -focused		More message -focused →		
適した活動	歌 TPR カード合わせ	クイズ ゲーム インタビュー	Communication Activities Information Gap ロールプレイ		
活動の対象	← 対教師		→ 児童対児童		
言語材料	身の回りの名詞		語彙を増やす		
	簡単な動作動詞 be動詞 have likeなど		語彙や文を増やす I want to be ~		
	What	Where	When	Who	Whose

学年に適した題材を配列する

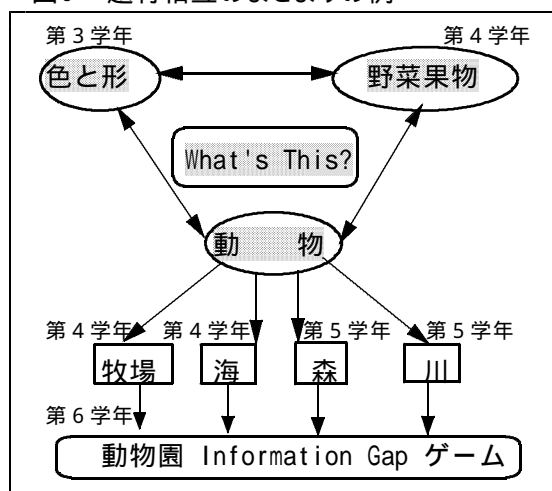
以上のような観点で検討した題材は相互に関連性を持ち、大きなまとまりでとらえることができる。そこで、題材を

- ・ 生活空間のひろがり
- ・ 活動方法や形態
- ・ 扱う言語材料

などから検討し、その題材を扱うのに適した学年を決定する。そして、季節や学校行事、学習内容との関連を図りながら実施時期を決定するようにする。

次ページ図5は、相互に関連をもつ題材のまとまりの例である。児童にとって興味・関心の高い「動物」を活動の素材としているものであ

図5 題材相互のまとまりの例



る。

児童は多くの動物の名称を知ることに関心が高い。「What's this?」という問いに対して、単に動物の名称を提示するよりも、色や形、動物の好きな野菜や果物をヒントに、児童がゲーム感覚で動物を推測する場面を設定し表現に出

会えるようにすることが望ましいと考えた。

動物をテーマとした歌や絵本は数多いので、どれを選択するかによって、活動の対象となる動物の名称の構成を決定することができる。ここでは、歌や動作化などを通して表現に触れることが可能な牧場や海の動物を第4学年で、色や形以外の多様な語彙がヒントとして必要になる動物を第5学年で、児童が相互に既習表現や言葉によらない伝達手段などを駆使して情報を交換する「Information Gap」のゲームを第6学年で扱うように考えたものである。

各学年の題材配列の例

現在、群馬県においては、三学期制を取り入れている学校と二学期制を取り入れている学校があるが、どちらにも対応することができるようにするために、各学年11の題材を提示した。また、単発的な実施ではなく、まとまりをもった時間の中で表現に触れられるような学習過程を考え、1単元4時間計画で作成した。各学校

表4 各学年の題材例

第3学年	第4学年	第5学年	第6学年
Hello, Everyone!	This is My Family	Who is That?	This is My Friend
What's Your Name?	In School	Four Seasons	World Weather Report
How's The Weather?	Numbers	What Do You Do Today?	Animals in The World
What's This? (色と形)	What's This?(野菜果物)	In The Kitchen	Where are You from?
Numbers	What's This?(動物)	What's This?(動物)	My Summer Holiday
What's This?(学用品)	Happy Halloween	Let's Go! In My Town	My Home Town
Day of The Week	My Body	Phone Activity	Fast Food Delivery Service
Left or Right?	My Day	In The Restaurant	Merry Christmas
My Body	Daily Life	Sports	Let's Travel
My Family	Let's Go Shopping	Let's Go Shopping	Jobs
Let's Play Game	ABC?	ABC?	ABC?

が、実情に応じて活動を縮小したり拡張したりして、適時性を考えて実施できるようにと考えている。

各学年の題材の例の一覧表を、前ページ表4に示した。

英語活動の入門期となる第3学年の題材は、ほとんどの児童が初めて英語に出会うことを考慮し、自分に関することについての題材を設定した。

第3学年の前半で、児童が英語を使用していることが多い場面である「Hello, Everyone!(あいさつ)」や「What's Your Name?(自己紹介)」、外来語としていつも耳にしている「How's The Weather?(天気)」、「What's This?(色や形)」、「Numbers (数字)」などの五つの題材を位置付けた。児童の「その言葉は聞いたことがある」という経験は、英語が異質な言葉であるという抵抗感をやわらげ、新しい音やリズムをもつ英語を受け入れることを円滑にさせると考えたからである。児童の生活経験を活用した言語材料で、動作化を主な方法とした表現に慣れる活動を通して、英語活動の面白さを実感させたいと考え、第3学年の前半で扱うようにした。

次に、児童の身近な題材である「What's This?(学用品)」、「Day of The Week(一週間)」、「Left or Right(方向)」、「My Body(体の部位)」、「My Family(家族)」の題材を位置付けた。これらの題材で扱う言語材料は児童にとって身近であると同時に、前半の活動で慣れ親しんだ表現を利用しながら活動することが可能であると考えている。

この第3学年の題材をもとに、第4学年から第6学年の題材は、図4で示した題材配列上の留意点に基づいて言語材料や活動方法を発展させて行うような活動を考え、位置付けた。

また、各学年一題材ずつ、外国の文化を直接体験する題材を設定した。外国の生活や行事を体験することを通して、日本の生活や文化との共通点や相違点について気付いたり、関心を高めたりしたいと考えたからである。題材、言語材料、活動方法などについて検討し、各学年に位置付けた。具体的には、第3学年の「Let's Play Game(外国の遊び)」、第4学年の「Happy Halloween(ハロウィン)」、第5学年の「Let's Go Shopping(買い物ごっこ)」、第6学年の「Merry Christmas(クリスマス)」である。

これらの題材の第3学年から第6学年の単元活動計画表(各4時間予定)と活動案については、Webページを参照されたい。

4 評価の在り方

(1) 現状と課題

文部科学省の「手引」には、「総合的な学習の時間」における評価について、「活動や学習の過程や活動への参加の度合いや発表などで見られる学習の状況や成果について、子どものよい点や学習に対する意欲や態度、進歩の状況などを踏まえて、所見等の記述で評価することが求められている。」とある。

しかし、中には活動すること自体が目標で、評価に取り組みしていない小学校もあるようだ。そのため、児童がどのように変容したかをとらえることが難しかったり、授業のねらいが達成されたかどうかを明確に把握できていない状況があると考えられる。

また、英語活動の目標が明確に示されていないため、目標と表裏の関係である評価もあいまいになっていると考えられる。評価を行っている学校の中には、「総合的な学習の時間」の4観点で評価しているところもあるようだ。しかし、英語を本格的に学習する中学校への橋渡しであるということを考えると、英語活動の評価は中学校英語科の四つの領域を考慮して行う必要があると考えられる。

以上のことから、英語活動を効果的に実施する上では、評価の観点を示し、単元ごとの評価規準を設定することが大切であると考えられる。

(2) 解決策

五つの視点で児童の学ぶ様子を見取り、評価する。

ア 様々なものを手がかりに、英語を聞こうとする。

イ 英語の音やリズムに関心をもち、話そうとする。

ウ 単語や文を手がかりに、聞いたり話したりすることに生かそうとする。

エ なぞり書きや転写などで英語を書き表そうとする。

オ 日本や外国の文化に関心をもとうとする。

本研究では、英語活動の目標を「身近な英語に慣れ親しんで、英語で互いに交流することを楽しむ態度を育て、英語を活用しようとする素地を培う。」ことととらえた。これは、英語活動が知識の習得を目指したのではなく、英語を使って人とかわり交流しようとする態度や英語を使おうとする意欲を育てることをねらいとしたからである。児童は、よい点を認められることにより、活動に一生懸命取り組むようになるので、英語で交流しようとする態度や英語を使おうとする意欲を育てるためには、児童のよい点を評価することが大切であると考え。聞く能力や話す能力などの技能の結果を評価するのではなく、相手が英語で何を言おうとしているのかを様々な方法で理解しようとしている姿などを評価し、励ますことが、児童のやる気を引き出し意欲を高めることになると考える。

このような評価の考え方に基づき、英語活動の内容として示した「聞くこと」、「話すこと」、「読むこと」、「書くこと」、「自国や外国の文化への関心」に対応し、関心・意欲・態度で評価することが適切だと考える。そこで、児童の学ぶ様子を見取る五つの視点を示した。

評価の視点アは、注意深く英語を聞こうとする態度が養われたかを見取っていくものである。身振りや話し手の表情、具体物や文を手がかりに、内容を想像し、うなずいたり動作で応じたりしながら英語を聞き取ろうとしていることをとらえていくのである。例えば、一日の行動に関する表現を知る活動において、動作に関する表現を聞き、話し手の動作の様子からその意味を想像しとらえようとしている姿のことである。

評価の視点イは、英語を通して伝え合おうとする態度が養われたかを見取っていくものである。英語特有の音やリズムやイントネーションに注意しながら、自分の伝えたいことを工夫して表現していることをとらえていくのである。例えば、各

月の英語表現に触れる活動において、ALTの自然な英語の音やリズムをまねて発話したり、歌ったりしている姿のことである。

評価の視点ウは、文字への関心が養われたかを見取っていくものである。単語の頭文字などを手がかりに表現に生かそうとしていることをとらえていくのである。例えば、料理に関する英語表現に触れる活動において、野菜の絵カードの文字を参考に表現に生かしてゲームをしている姿のことである。

評価の視点エは、英語の音声と文字の関係への関心が養われたかを見取っていくものである。なぞり書きや転写など簡単な方法で記入し、表現に生かそうとしていることをとらえていくのである。例えば、自己紹介する活動において、紹介する内容をカードに絵と簡単な英語で書いて、表現に生かしている姿のことである。

評価の視点オは、活動を通して考えたり、表現したり、互いに共感し合ったりする態度が養われたかを見取っていくものである。ALTと積極的に触れ合ったり、英語を通して異文化への関心が高まったことをとらえていくのである。例えば、外国の遊びを体験する活動において、日本と外国の同じような遊びを通してその違いに触れ、外国の遊びに興味をもって取り組んでいる姿のことである。

各学年の英語活動の目標に照らし、五つの視点から、学年の評価規準を次ページ表5に示した。

表5 各学年の評価規準表

観点		関心・意欲・態度				
視 点 学 年		様々なものを手がかりに、英語を聞こうとする。	英語の音やリズムに関心を持ち、話そうとする。	単語や文を手がかりに、聞いたり話したりすることに生かそうとする。	なぞり書きや転写などで英語を書き表そうとする。	日本や外国の文化に関心をもとうとする。
	第三学年	十分満足	A L T の話を注意深く聞き、素早く反応しようとする。	たくさんの友達と交流し、身振りを交えながら発話しようとする。		
	おおむね満足	身振りや表情、具 体物を手がかりに、 正しく動作で応じよ うとする。	英語の音やリズム を聞いたとおりにま ねて、発話しよう とする。			A L T と活動を 楽しみ、外国に関 心をもとうとする。
第 四 学 年	十分満足	注意深く最後まで 話を聞き、進んで動 作で応じようとし る。	既習表現を駆使し て、相手に聞こえる ような声で応じよ うとする。		表現を聞いて頭 文字で書くなど工 夫して書こうとし る。	英語と日本語の 表現の違いに気付 き、英語への関心 を高めようとする。
	おおむね満足	身振りや表情、具 体物を手がかりに、 単語を聞き取ろう とする。	英語の音やリズム に注意しながら、簡 単な英語を使って応 じようとする。		頭文字や絵など 簡単な方法で書き 表そうとする。	表現の面白さを 実感し、外国の言 葉や生活に関心 をもとうとする。
第 五 学 年	十分満足	英語の音やリズム に注意して聞き、適 切に応じようとし る。	工夫しながら、た くさんの友達と英語 で応じようとする。	頭文字を手がかり に読んで、表現 に生かそうとする。	なぞり書きや転 写をし、表現に生 かそうとする。	異なる文化とし ての外国の生活に 関心をもとうとし る。
	おおむね満足	聞き慣れた表現を 手がかりに、内容を 想像しながら聞こう とする。	音やリズムに注意 して、聞き慣れた簡 単な英語で応じよ うとする。	絵を手がかりに 頭文字や単語を読 んで、表現に生か そうとする。	頭文字など簡単 な方法でメモし、 表現に生かそうと する。	活動を通して表 現を楽しみ、外国 の様子に関心をも とうとする。
第 六 学 年	十分満足	表現の流れの流れ の中で、具体的な内 容や大切な部分を聞 き取ろうとする。	既習表現を用い て、工夫しながら応 じようとする。	単語や文などの 頭文字を積極的に 読み、表現に生か そうとする。	大文字や小文字 に注意して記入 し、表現に生かそ うとする。	活動を繰り返し 楽しみ、世界の国 々のつながりに関 心をもとうとする。
	おおむね満足	聞き慣れた表現を 手がかりに、大切な 部分を聞き取ろうと する。	聞き慣れた表現を 手がかりに、簡単な 英語で応じようとし る。	聞き慣れた単語 や文を読み、表現 に生かそうとする。	なぞり書きなど 簡単な方法で記入 し、表現に生かそ うとする。	英語を用いて、 外国人と交流する ことに関心をもと うとする。

5 学級担任の英語活動指導上の留意点

(1) 現状と課題

英語活動は学級担任とA L Tとの協力的な指導で行われることが多いが、基本的には学級担任を主な指導者として行われることが望ましいといわれている。

しかし、A L Tの訪問時に合わせて英語活動を

実施することが多いために、授業に関する事前打合せの時間設定が難しいこと、学級担任とA L Tの活動内容に関する共通理解を図ることが難しいことなどの現状がある。そのため、A L Tのもつ英語の専門性に委ねて英語活動が行われ、学級担任の指導上の役割が明確にされない状況が多いようである。また、「担任としてどうかかわったら

よいか分からない。」という疑問が、学級担任の間に根強く残っているようである。

英語を使って交流することの楽しさを児童が実感し、英語を活用しようとする意欲や態度をはぐくむためには、直接児童とのかかわりをもつ学級担任の不安を解消し、児童と学級担任が共に活動し、交流することが大切であると考え。

(2) 解決策

学級担任の機能を生かした活動や児童への支援を心がける。

学級担任は児童の実態を把握しているので、児童の興味・関心がある身近な話題を活動に反映することが可能である。また、他教科の学習も担当しているので、教科学習の内容を関連付けて英語活動を考案することも可能である。英会話という固定観念にとらわれず、これまでの教科などの指導経験を生かし、「遊び」の要素を取り入れるなどして、児童の興味・関心を高める活動を展開することができるであろうと考えている。

また、英語活動は、多くの児童が初めて日本語以外の言葉に触れるという機会である。英語に対する期待と不安を抱えている児童にとって、学級担任が笑顔で寄り添っていることは、英語に対する精神的な負担を軽減することになる。したがって、学級担任には、児童のどんな反応も失敗も好意的に受容する構えが大切であると考え。同時に、常に、児童全体が視野に入るよう位置したり、個やグループに対応したりして児童の様子を的確にとらえることに心がけ、気付いたことをA L Tに伝えながら活動を修正したり、進行したりすることも大切である。

A L Tとの協力的な人間関係を築き、指導場面に生かせるようにする。

英語活動におけるA L Tの果たす役割は、重要である。A L Tの存在そのものが異文化であり、国際理解の対象といっても過言ではない。自校の英語活動のために、A L Tがもっている力を十分発揮できるよう、協力的な人間関係を築くことが大切である。

A L Tは英語の専門家であるので、一つの場面で使用する英語表現を数多く知っている。事前打合せの際、本単元や本時の活動のねらいを十分に

伝えることを通して、適切な英語表現を選択できるようにすることが大切である。その際、これまでの活動の様子や児童の実態を参考にすることが重要である。

一方、A L Tは、指導においては専門家ではないため、教材の提示の仕方や児童の掌握の技術などについては、学級担任の方が経験が豊かである。活動の展開や指導技術について学級担任が力を発揮すれば、英語活動の授業が円滑に展開されると考える。しかし、A L Tのもつゲーム感覚の指導技術は児童や学級担任にとっても新鮮である。したがって、両者の良さが発揮できる役割分担を心がけるようにすることが大切である。

学習者のモデル役となり、英語活動の楽しさを児童と共感できるようにする。

学級担任は活動の進行役を務めたり、A L Tの協力者となって指導したり、活動状況を客観的に把握したりするなど、多くの機能を果たさなければならない。しかし、「児童の英語を通じたコミュニケーションへの意欲や積極的な態度の育成」という点から考えると、児童とともに活動し、英語活動を楽しんでいる児童役（学習者のモデル）を演じることが、重要な役割となる。学級担任と楽しさを共感した体験は、児童の英語活動に対する意欲を高めることになると考えるからである。たとえ英語運用能力に自信がなくても、活動を通して児童とともに学ぶという構えが大切である。そのためには、A L Tの示す身振りや動作を瞬時にとらえ、自分の動作として表現するように心がけることが重要である。

6 英語活動の環境の整備

(1) 現状と課題

現在、英語活動は、群馬県下のほとんどの小学校で行われるようになってきている。「総合的な学習の時間」などを使って、それぞれの地域、学校、児童の実態に応じて取り組まれている。しかし、各学校の英語活動の目標の設定や評価の方針、年間指導計画をはじめとした指導の諸計画作成や見直し、教材や教具の整備状況などに目を向けると、万全でない様子がうかがえる。また、英語活動を実践する役割にある小学校教師には、文法重視の「読むこと」や「書くこと」に重点を置いた英語教育から、「聞くこと」や「話すこと」に重点を

置いた英語体験活動への発想の転換が要求されている。

国際理解に関する学習の一環として英語活動が行えるようになって以来、民間や公的機関による研修の機会が設けられるようになった。しかし、時間や参加人数などで条件が合わず、だれもが自主的に参加可能な状況であるとは言い難いようだ。また、各学校では、他教科に比べ英語活動の実施時数が少ないことや実践にあたってはALTの力に負うところが大きいことなどから、校内の職員研修という形で実施しているところは多くないようである。

したがって、英語活動の実践を支える環境としての校内体制や校内研修を整えることが大切であると考えます。

(2) 解決策

〔校内体制の在り方〕

各学校の英語活動の基盤づくりのために、ALTとの連絡や調整を中心に行い、英語活動を中心に行う組織を校務分掌に位置付け、研修推進委員会と連動していけるようにする。

自校の英語活動の運営を行う英語活動部を組織し、英語活動やALTとの連絡や調整を中心に行う英語活動主任とその実働組織としての英語活動部会を位置付けることが必要であると考え、図6と表5に示した。具体的には、以下のようである。

各学校の実態に応じた活動を計画し実践するために、全体会を活動推進の中心に位置付ける。ALTが参加可能であれば、日時を調整し、参加できるようにする。

英語活動部は、英語活動主任が部長を務め、構成員は各学年（あるいはブロック学年）代表とALTからなる。自校の英語活動の具体的な内容についての提案母体である。また、英語活動実施後、各部員が中心になって、各学年の実施状況と指導上の反省についてまとめ、資料の蓄積に努める。英語活動主任は、単元毎（あるいは毎月）に各学年の反省を収集してまとめ、次年度の立案の貴重な資料とする。

各学年（ブロック）部会は、児童とともに楽しい英語活動を具現化する組織である。学年の英語活動部員は、ALTとの事前打合せが円滑

図6 校内組織の例

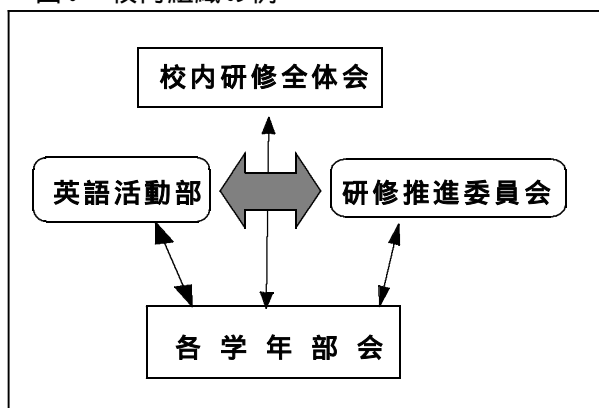


表5 組織の構成員と活動内容

組織名	構成員	主な活動内容
校内研修全体会	全職員 ALT	・活動内容の検討 ・全職員の英語研修
研修推進委員会	校内研修主任 学年代表1名 英語活動主任	・研修内容の計画と立案及び調整 ・英語活動部と連動
英語活動部	英語活動主任 学年代表1名 ALT	・英語活動の諸計画の立案 ・実践資料の蓄積
各学年部会	各学年の学級担任など全員	・展開案の検討と実践 ・教材準備

に、効果的に実施できるよう、連絡や調整に務める。各学級担任の英語運用能力を高めるためには、英語活動でのゲームのルール説明や示範を行うことが効果的であり、事前打合せの中核とするとよい。また、指導力向上のため、互いの活動を積極的に見合うことが大切であり、そうした雰囲気作りに努めるようにする。

〔校内研修の在り方〕

英語活動部や従来の研修推進委員会などの組織を中心に、各学校の実態に応じた英語活動実践のために具体的な課題を認識し、学習方法や教材開発について研鑽^{けんさん}を積むことができるように、校内研修体制を確立する。

各学校は、地域や自校の実態に応じた目標や内容を定め、年間指導計画を作成し、各学年の発達

段階に応じた活動内容を考えなければならない。

そのために、全教師が無理なく意欲的に取り組める、指導と評価の一体化を目指した研修を理論や実技・演習をまじえた内容で実施すると効果的であると考え。次のように、その研修形態の例を示したい。

講師招^{しょうへい}聘による講演会

英語活動の概要、実践例、指導と評価などについての講演会を行う。また、自校の児童を対象にした講師による示範授業を参観し、その授業をもとに講演会を行う。

校内授業研究会

英語に慣れ親しむ活動の具体化のために、授業仮説をもって英語活動を提案し、活動の内容や投入した手だてについて、授業の結果をもとに話し合う。実施形態が、学級担任単独の場合やALTとのチーム・ティーチングの場合などにより、討議の内容も異なってくるであろうと思うが、各学校の実態に応じて取り組むようにする。

単元開発研究会

自校の英語活動の具体案の作成のため、「単元の適時性」「目標」「言語材料」「活動の内容と手だて」「教材や教具」などについて、1単位時間の実践に留まることなく検討する。この研修においては計画立案だけでなく、開発した単元の検証のための授業研究会を併せて実施することが大切である。

先進校視察研修

英語活動に先進的に取り組んでいる学校に向き、英語活動への取組の概要について研修を受けたり、実際の授業を参観したりする。現在では、個人研修として行われることが多くなっているが、校内研修全体会などの機会をとらえて研修報告を行い、全教師の英語活動の指導改善に役立つようにする。

英語運用能力向上研修

ALTの協力を得て、校内で実施することが可能な研修である。主な内容としては、「実際の活動や歌の実技・演習」や「教室でよく使われる英語の演習」、「仮想授業体験」、「コミュニケーション能力の基礎を高める会話体験」などがあり、具体的な主な内容は、以下のようなものが考えられる。

- ・ 実際の活動や歌の実技・演習
1 単位時間の英語活動で行われるゲームや

歌について、事前に、英語を使って試行する。事前打合せの際にすると効果的である。

- ・ 教室でよく使われる英語の演習
英語活動で、児童に指示を出す際によく使われる英語について研修する。事前打合せの機会を使って、何度も実施すると効果的である。
- ・ 仮想授業体験
指導役が実際の活動場面を想定し、グループの作り方、ゲームの進め方などを考え、英語を声に出しながら練習する。活動構成を吟味するためにも効果的である。
- ・ コミュニケーション能力の基礎を高める会話体験
ALTが来校した時などに、簡単な日常会話について練習する。負担にならないよう短時間で、楽しい雰囲気の中で行えるようにする。

7 英語活動を生かした中学校1年次の英語科指導の在り方

(1) 現状と課題

小学校英語活動は音声を中心に、児童の日常生活の中での身近な英語を取り上げ、興味・関心や意欲の育成をねらった様々な活動を行い、歌やゲーム、クイズ、ごっこ遊びなどゲーム的要素を取り入れている。活動が音声中心であるのは、児童にとって文字を使って意思の疎通を図ろうとすることが、負担が大きいからである。また、ゲーム的要素を取り入れた楽しい活動を行うことは、だれもが英語活動に楽しく取り組めるようにするためである。このような英語活動は、児童が積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を身に付けることにつながり、中学校英語科の実践的コミュニケーション能力の基礎を養うという目標を達成する上でも効果的であると考え。また、小学校で英語を使ってコミュニケーションをすることは楽しいという気持ちを体験的に培ってきた児童は、中学校に入ってから、意欲的に学習を続けていけると考える。

このように、英語活動は、児童の意欲・関心を育てる上で効果的であるが、その活動について中学校英語教師がどれくらい把握しているかは疑問である。中学校学習指導要領においては、「聞くこと」や「話すこと」の音声による実践的コミュニケーション能力の育成が求められており、音声

中心の英語活動同様、中学校でも音声重視の指導が行われているが、それは英語活動を十分に踏まえたものにはなっていないと考える。中学校において、英語活動を踏まえず指導を行うことは、英語学習に対して抵抗感を感じさせてしまうことになりかねない。また、英語活動で耳から英語を取り入れ、体や言葉で表現してきた生徒たちが、中学校で文字を中心とした学習をする際、これまでの経験を生かさず、文字を導入すると、英語を難しいと思ってしまう状況が出てくることも考えられる。

さらに、中学校英語科で言語活動を行うに当たっては、実際的な言語の使用場面を示し、コミュニケーションを図る活動の中で、生徒が自ら考えて表現することが大切である。そのため、日常の

(2) 解決策

次の二つの手だてを単元の導入で取り入れることにより、中学校1年次の英語科指導の工夫を図る。

ア 小学校英語活動の音声を中心とした指導方法を取り入れながら、音と文字を結び付け、「聞くこと」と「話すこと」の活動から「読むこと」と「書くこと」を加えた活動へと4技能のバランスの取れた指導を行う。

イ 小学校英語活動と中学校英語科の学習内容における話題や言語の使用場面のカリキュラムのつながりを考え、英語活動で得た経験や言語材料を生かし、中学校での英語学習を進めることができるようにする。

生徒が英語に対する興味を失わずに、無理なく中学校での英語学習に取り組めるようにするためには、英語科学習の導入期である中学校1年次に、小学校英語活動を生かした活動を行い、楽しく学習することが大切であると考え。英語は楽しいという気持ちを持続させることにより、中学校での学習に意欲的に取り組んでいけると考えるからである。

そこで、中学校での指導に、音声中心の英語活動の指導方法を取り入れ、発展させていくことは、生徒のコミュニケーションを図る態度や能力を育成するうえで効果的だと考える。中学校では、今まで音の蓄積と文字に慣れ親しむことが短時間で行われていたが、小学校で音に十分慣れ、音の蓄積を行っており、さらに文字にも触れてくるので、中学校での英語科学習においても、引き続き音と文字に関連性をもたせ、単語を段階的に指導していくことによって、初めて見る単語も推測して読めるようになり、生徒は、あまり抵抗を感じずに、「読むこと」の活動にも取り組めるようになると思われる。すなわち、音声を重視した英語活動の

授業においては、使用場面を設定して指導しているが、この使用場面が英語活動で扱った場面と似ていることが多い。小中の英語指導において連携が取れていないと、小学校で行った活動を中学校でも単に繰り返すことになってしまい、単調さをまねくことになってしまう。中学校では、小学校での英語活動をより充実・発展させて、生徒の知的好奇心を満足させるような学習を行うことが大切であり、カリキュラムの連携についてしっかり把握しておく必要がある。

以上のことから、生徒が、小学校英語活動との差異を感じることなく、スムーズに中学校の英語学習に入っていけるように、英語活動を生かした指導を中学校で行う必要があると考える。

指導を継続し、それに文字を関連させ、読んだり書いたりすることで、活動の幅が広がっていくことにつながると考える。中学校では音声を重視した指導を行うとともに、他の技能とも関連を図った指導を行うことも大切になってくるため、「聞くこと」と「話すこと」を中心とした活動を、「読むこと」と「書くこと」の活動へと無理なくつなげていく工夫も必要である。

また、英語活動と中学校での英語科学習の内容に系統性をもたせることは、小学校での活動を深化・補充するうえで重要である。中学校では、話題や使用場面を英語活動より広げて生徒に与えながら、小学校で身に付けた表現を整理し、それらを知識として確認することが大切である。それによって、生徒は英語活動での表現を文法事項の知識として確実に身に付けることができ、実践的コミュニケーション能力の基礎を養うことにつながると考える。

なお、英語活動と系統性をもたせた中学校1年次の英語科年間指導計画表と単元指導計画表の一例、各単元の最初の3時間程度の指導案について

はWebページを参照されたい。

研究のまとめ

本研究は、群馬県における小学校英語活動の現状の把握と結果の分析を通して、英語活動の充実と中学校1年次の英語科指導の改善を図るための具体的な方策や内容を考察したものである。

英語活動の目標と内容、評価の在り方、題材選定の視点を柱に、全7項目の課題解決の手だてを示した。また、これらの考え方を基に、小学校第3学年から第6学年までの英語活動と中学校1年次英語科指導の指導計画表も作成した。

しかし、この方策や内容は、課題解決のための一例であるため、各学校の実態に応じて修正していただきたいと考える。

<主な参考文献>

- ・松川 禮子 著 『明日の小学校英語教育を拓く』 アプリコット出版(2004)
- ・高島 英幸 著 『文法項目別英語のタスク活動とタスク 34の実践と評価』 大修館書店(2005)
- ・太田 美智彦・長江 宏 共著 『中学校英語科絶対評価の処方箋』 学校図書(2003)

(担当指導主事 武藤 一幸)